生誕150年
石川寅治展

明治・大正・昭和を生きた画家
Ishikawa Toraji
150th Anniversary Exhibition

石川寅治　明治8−昭和39／1875−1964

高知市鉄砲町（現・桜井町）に生まれる。高知県立第二中学校（明治45年に第一中学校と合併）在学中に、第一中学校（現・追手前高校）で図画教師をしていた洋画家・上村昌訓から絵の手ほどきを受ける。明治24（1891）年に上京し、洋画家・小山正太郎が主宰する画塾・不同舎（ふどうしゃ）に入門。不同舎では西洋から伝来した版画を模写したり、石膏像、モデル、あるいは風景を写生するなどして、徹底的に西洋画の基礎を学んだ。明治26（1893）年には西洋画制作を推進する団体、明治美術会の第5回展に出品。初期の油彩画は、全体に色調が暗く、「脂派（やに）」と呼ばれた明治の初期日本洋画の特徴をも伝える。明治35（1902）年には友人の水彩画家・大下藤次郎と共に渡米。ボストンなどで展覧会を開催し作品を売って旅行資金を稼ぎ、翌年にはヨーロッパへ渡る。明治37（1904）年に帰国すると、柔らかい光の表現といった新たな要素を取り入れた作品を手がける。

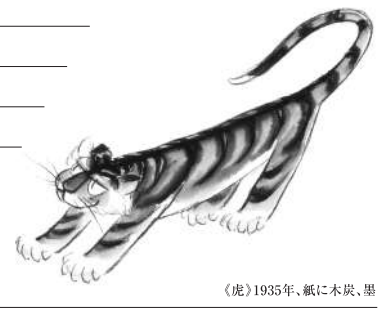
明治40（1907）年、文部省美術展覧会（文展）の第1回展に出品。以後、文展やその後継の帝国美術院美術展覧会（帝展）で受賞を重ね、審査員も務めるようになる。一方、明治美術会の後身として結成された太平洋画会や在京の高知出身者による団体、土陽美術会といった在野の美術団体でも活躍した。

国内をはじめ、台湾や中国へも写生旅行へ行き、旅をしながらの制作を生涯行う。戦中は海軍嘱託画家として中国や南方に派遣された。戦後も制作意欲は衰えず、昭和22（1947）年に太平洋画会が分裂すると示現会（しげんかい）を設立し、代表となる。晩年は、大胆な色と平面的な描写の作品を多く残した。昭和28年（1953）、洋画界と絵画教育につくした功績に対して日本芸術院恩賜賞を授与された。昭和39（1964）年、東京で死去。明治から昭和にかけてひたすらに絵と向き合い続けた人生を終えた。

石川寅治略年表

参考:『石川寅治展』高知県立美術館、2002年

和暦／西暦		年齢	
明治8	1875		4月5日、高知市鉄砲町（現・桜井町）に生まれる。
明治21	1888	13	4月、第二中学校入学。このころから上村昌訓に洋画を習う。
明治24	1891	16	2月、第二中学校を中退して洋画修行を志して上京。　7月、小山正太郎が主宰する洋画塾・不同舎に入門。
明治26	1893	18	4月、明治美術会第5回展に油彩画と墨画を出品。
明治28	1895	20	10月、明治美術会第7回展出品。　10月から翌年3月にかけて浅草の日本パノラマ館での小山正太郎の日清戦争《平壌包囲攻撃図》の助手を務める。
明治30	1897	22	4月、明治美術会第8回展出品。　3月から5月、浅草の日本パノラマ館での小山正太郎の《旅順総攻撃図》の助手を務める。
明治33	1900	25	4月、パリ万国博覧会出品。　7月より翌年3月、小山正太郎が渡仏、不同舎生徒の指導を託される。
明治34	1901	26	11月、明治美術会が臨時総会で組織改革、新会務委員となる。
明治35	1902	27	1月、明治美術会を改めて、太平洋画会を結成。　3月、太平洋画会第1回展出品。以降、第2回、第4回展を除き1944年の第40回展まで出品。 4月、高知で矢野静江と結婚。　10月、大下藤次郎とアメリカに渡り、11月、ボストンのホテルで水彩画二人展を開く。
明治36	1903	28	1月末にバッファローで、2月、デトロイトで水彩画二人展を開く。　3月、アメリカからヨーロッパに渡り、各国の美術館などを見学。
明治37	1904	29	雑誌『明星』第2～8号の挿絵を描く。　6月、ヨーロッパよりインド洋経由で帰国。　6月、谷中清水町に太平洋画会研究所が開設され、指導教官となる。
明治38	1905	30	11月、谷中真島町に太平洋画会研究所が新築され、絵画部の指導にあたる。
明治40	1907	32	3月、東京勧業博覧会に出品。3等賞を受ける。　10月、第1回文展に出品。以降、第4回展を除き1918年の第12回展まで出品。 12月、在京の高知出身の美術家と土陽美術会を創設。幹事となる。　12月、アトリエ並びに住宅を小石川丸山町に建てる。
明治42	1909	34	4月、第1回土陽美術会を上野不忍池畔弁天堂にて開催。
明治43	1910	35	5月7日、父義忠が死去。家督相続をする。　5月～10月、日英博覧会に出品。　11月、土佐美術協会が石川らの尽力により土陽美術会高知支部となる。　12月、第2回土陽美術会を開く。
明治44	1911	36	1月、第3回土陽美術会展が高知で開催され、出品。 3月、太平洋画会の吉田博、中川八郎、小杉未醒、大下藤次郎、渡辺審也、河合新蔵、満谷国四郎と瀬戸内海、四国、中国、九州地方へ写生旅行。のちに『瀬戸内海写生一週』（興文社）を写生旅行した8人で刊行。 12月より翌年3月まで、中川八郎、吉田博と沖縄に写生旅行し、水彩画帖〈琉球〉を合作する。
大正2	1913	38	11月号、土陽美術会報『土陽美術』創刊号に表紙絵をかく。以降、第2号、3号の表紙絵、4号、5号の挿絵を描く。
大正4	1915	40	6月、土陽美術会の分身、緑葉画会（石川・広瀬東畝、本山白雲）を浅草蓬莱屋で開く。
大正5	1916	41	2月、サンフランシスコ世界博覧大会に出品、三等賞を受ける。　5月、三越呉服店にて方友画会（中川八郎、中沢弘光、安田稔）を開く。　11月、大阪三越呉服店にて方友画会を開く。
大正6	1917	42	1月8日～3月18日、台湾に旅行。　1月、3月、台北・鉄道旅館で個展を開催。　5月、土陽美術会（高知市公会館）に出品。7月13日～8月18日、文部省依頼の立太子礼奉献作品制作のため台湾に再び行く。
大正7	1918	43	4月、師小山正太郎の後をうけて東京高等師範学校の講師となり図画専科を担当する。以来15年間図画教育に尽した。　5月、土陽美術会10周年記念展を開き、出品。 6月、「台湾旅行」を執筆した『新日本見物』（金尾文淵堂）が刊行される。　10月、立太子礼奉賛画を完成させ、さらに台湾総督府の嘱託となり、新庁舎会議堂に壁画を描くことになる。 10月、満州朝鮮（大連、旅順、奉天、吉林、ハルビン、朝鮮）に写生旅行し、大連で展覧会を開く。
大正8	1919	44	1月、台湾に渡り、総督府新庁舎の壁画《日の出》と《夕陽》を計画する。　3月、文部省教員検定委員会臨時委員となる。昭和8年まで15年間にわたり勤める。　5月、方友会同人展を三越で開く。 10月、第1回帝展に審査員となり、《深碧の流（木曽川筏流し、寝覚の床》などを出品。以降、1934年の第15回展まで毎年出品。
大正10	1921	46	1月、東京市外滝野川にアトリエと住居を建築して移転。
大正11	1922	47	3月、平和記念東京博覧会（東京府美術館開館）に審査員として出品。
大正12	1923	48	1月、台湾総督府より、聖徳明治絵画館に献納の北白川宮殿下台北入城の揮毫を依嘱され、渡台する。　4月、東京府美術館常議員となる。
大正13	1924	49	5月、大連と奉天で太平洋画会展が開かれ、出品。　この年、第1回大阪市美術協会展に出品。
大正14	1925	50	2月、中等図画教科書『最近図画』（富山房）を編纂し刊行。　8月、太平洋画会夏期講習会の講師を勤める。　11月、台北師範学校での第1回絵画展に参考出品する。
大正15 （昭和元年）	1926	51	5月、第1回聖徳太子奉賛展の委員となり出品。　10月、聖徳明治絵画館に《北白川宮殿下台北入城（台湾鎮定）》を献納。
昭和2	1927	52	2月、文部省より教員検定委員会無試験検定調査事務を嘱託される。　6月、明治大正名作選に出品される。
昭和3	1928	53	3月、朝香宮妃充子内親王及び喜久子女王に絵画教授、同7月まで続ける。　5月、台北・建成小学校で行われたクレヨン・クレパス画展の審査員を務める。
昭和4	1929	54	11月、太平洋画会研究所が太平洋画美術学校として発足。
昭和5	1930	55	3月、上海より蘇州、杭州へ旅行、江南の風景を写生する。　6月、国際美術協会第2回内国展に出品。
昭和7	1932	57	4月、太平洋画会創立30周年展に出品。
昭和9	1934	59	4月ごろ、木版画集〈裸女十種〉を版行。
昭和10	1935	60	3月、東京府美術館十周年記念現代総合展に出品。　6月、帝展改組に反対して結成された第二部会に加わり、展覧会委員となる。　10月、第二部会第1回展の審査員となり出品。
昭和11	1936	61	11月、改組文展（招待展）の委員となり出品。
昭和12	1937	62	4月、明治、大正、昭和三聖代名作展に出品される。　5月、朝香宮堪子女王陛下の絵画教授となり、三年間続ける。 5月、海軍協会主催の第1回海洋美術展に常任理事として出品。　10月、第1回新文展に出品。以降、第4回展を除き、1943年の第6回展まで出品。
昭和13	1938	63	10月、海軍省嘱託となり中国（上海、南京、安慶）に派遣される。
昭和14	1939	64	7月、聖戦美術展に出品。　9月、海軍省軍務局軍務嘱託となる。
昭和15	1940	65	4月、支那事変における勤労により賜品及び従軍記章を拝受。　5月、第4回海洋美術展に《海洋爆撃》を出品。　10月、紀元2600年奉祝美術展に委員となり《出湯の宿》を出品。 12月、作戦記録画《鎮江攻略》を完成して海軍省に納める。　12月、海軍従軍画家約60名で結成された親睦団体・海軍従軍美術家倶楽部に入会。
昭和16	1941	66	2月、大日本海洋美術協会が発足し常任理事となる。　5月、第5回大日本海洋美術展に審査員となり海軍省所蔵の《海洋爆撃》《鎮江攻略》を参考出品。 12月、『肖像画の描き方』（崇文堂）を刊行。　この年、第1回大東絵画展に賛助出品。
昭和17	1942	67	5月、第6回海洋美術展に出品。　12月、大阪・美交社で近作展を開く。
昭和18	1943	68	7月、海軍省より戦争記録画のため南方方面に派遣される。　9月、太平洋美術学校の校長となる。
昭和19	1944	69	5月、第8回海洋美術展に《永野元帥》を出品。　11月、戦時特別文展に《南太平洋海戦》を海軍省より特別出品される。　11月、東京都板橋区上赤塚町に移転。
昭和20	1945	70	3月、東京大空襲により谷中真島町の太平洋美術学校の建物が焼失。
昭和21	1946	71	3月、第1回日展に《裸女》を出品。以降、第13回展まで出品。
昭和22	1947	72	2月、東京都美術館参与となる。　10月、太平洋画会展が分裂し、示現会を結成しその代表となる。
昭和23	1948	73	3月、第1回示現会が開かれる。以降毎年開催され、死去する年に開催された第17回まで出品。　6月、東京高等師範学校講師を嘱託される。 10月、第2回高知県展の審査員を、山脇信徳、中村博と勤める。　この年、日動画廊の明治会に出品。
昭和24	1949	74	6月、東京教育大学講師となり、以降5年間勤める。　10月、第3回高知県展に招待され《裸婦》を出品。
昭和26	1951	76	1月5日、奉賛綜合美術展が開かれて出品。全国14カ所を巡回する（翌年9月11日まで）。
昭和27	1952	77	10月、第6回高知県展に招待出品。以降、第9回展までと第15回展に招待出品。
昭和28	1953	78	1月、在京の高知県出身文化人の南風会同人となる。　5月、日本芸術院恩賜賞を授与される。　7月、『南風』第3号に挿絵を描く。以降、第5から7号、10号から22号、25,26号に表紙絵や挿絵を描く。
昭和29	1954	79	5月、高知市中央公民館で個展、20展余を出品。
昭和30	1955	80	この年、伊豆西海岸の三津港に別荘を建てる。
昭和32	1957	82	5月、日本橋三越で個展、近作35点を出品。　7月、妻静江が死去、享年76歳。
昭和33	1958	83	3月、日展運営会が解散し、社団法人日展となり、監事に就任。　11月、第1回新日展に監事として《下津井の港》を出品。以降、第6回まで毎年出品。
昭和35	1960	85	1月、東京都板橋区成増に転居。
昭和38	1963	88	8月、米寿祝賀会及び記念会展を日本橋三越で開催、30点を出品。
昭和39	1964	89	8月1日、都内の病院で敗血症の療養中に、心臓衰弱で死去。　10月、第7回新日展に遺作として出品される。
昭和40	1965		3月、第18回示現会で遺作室に16点が出品される。　6月、第17回高知市文化祭、高知大丸で石川寅治遺作展に62点が出品される。



《虎》1935年、紙に木炭、墨

一 旅する画家

寅治は画業の初期から晩年まで写生旅行に繰り返し出かけた。画家仲間と共に旅することも多く、不同舎では東京近郊だけでなく、一週間ほどの写生旅行も年2回行われており、同郷の美術家たちで創設した土陽美術会でも春秋の写生旅行を行った。明治44(1911)年春には同門の画家で、太平洋画会の設立に関わった満谷国四郎、吉田博、中川八郎、大下藤次郎ら8人で瀬戸内海と中四国、九州を旅し、同年冬から翌年にかけては吉田、中川と3人で沖縄を旅している。旅の成果は油彩画の制作だけでなく、土陽美術会の機関誌『土陽美術』や『瀬戸内海写生一週』といった刊行物の挿絵や文章、画帳〈琉球〉の作成として現れた。死去する前年に雑誌に掲載された文章にも年に2、3度写生旅行をし、「八十八歳にもなっているのだから止めた方がいいと言ってくれる人もありましたが、自分では何とも思いませんでした※」と書いている。

※ 石川寅治「日々また日々」『文藝朝日』1963年11月号、p.80。

画帖〈琉球〉より《那覇の磯辺》1912年頃

二 台湾への旅

《驟雨一過》1934年頃

港内の景色は朝夕気持のい、變化を見せた、樺色の帆を上げたり、色々に彩色された船體を動かして出入りするジャンクの様は、又とない好い眺めであつた。殊にサンパンと云ふ船は實に奇の奇なるもので、常に好奇の眼を以て之を眺めて居たのであつた※

寅治は大正6(1917)年1月に初めて台湾へ渡り、同年の夏にも再び訪れている。この2度の旅について、翌年刊行された『新日本見物』に上に引用したような文章を寄せ、同地の様子を伝えている。大正7(1918)年に台湾総督府から新庁舎壁画制作の依頼を受けるなど、その後も2度台湾を訪れている。最初の旅では、まず北部の港、基隆(キールン)港に到着した後、台北へ移動。その後台南、打狗(タアカウ)(現・高雄)と台湾の西側を南下した。寅治にとって台湾の風物は画趣そそられるものだったようで、港の風景や台湾の女性などを繰り返し描いた。なかでもジャンクと呼ばれる船に興味を持ち、油彩、版画、水彩などさまざまな作品に描いている。

※ 石川寅治「台湾旅行」『新日本見物』1918年、金尾文淵堂、p.49

三 版画シリーズ

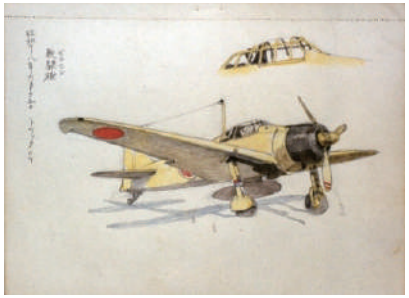
寅治は大正3(1914)年頃から20年間ほど間断的に版画を手がけた。版画界では、明治末から下絵、版の作成、摺りまでをひとりの作家が行う創作版画運動が活発化するが、寅治は絵師、彫師、摺師がそれぞれ行う分業制をとった。「彫には彫、摺には摺の独特の技術があるのですから、それを一人の画家でマスターすることは困難ではないでせうか※」と語った寅治は、彫りや摺りに関して口を出すことはなく、色彩指導をするのみだったという。昭和9(1934)年に発表された代表作〈裸女十種〉は、赤や黒の背景にボリュームのある裸体をさらけ出す女性が表されている。女性の周りにはカラフルな柄のカーテンやソファなどの調度品、刺繍の施された靴や麻雀牌などの小道具が配され、昭和初期に流行した「エロ・グロ・ナンセンス」と呼ばれた退廃的な風潮やモダンガールが闊歩した華やかな時代の雰囲気を感じさせる。

※ 宋紫外「石川寅治氏に聴く一夕話」『浮世絵藝術』第三巻第九号 浮世絵藝術社 1934年、p36。

〈裸女十種〉より《鈴の音》1934年

四 戦争画

不同舎の師、小山正太郎は明治28(1895)年と30(1897)年に浅草の日本パノラマ館の絵を制作している。それぞれ日清戦争と日露戦争を題材にしたものだった。パノラマ館とは円筒状の建物内部にぐるりと囲むように切れ目のない眺望を描き、中に入ると壮大な景色を体感できる、というものであった。高さ15メートル、幅114メートルに及ぶ大画面の制作のため不同舎の舎生たちが助手となり、寅治もそのひとりとして関わっている。昭和13(1938)年、すでに官展で審査員を務めるなど、画壇の重鎮となっていた63歳の寅治は海軍省の嘱託画家となり、陸・海軍省からの依嘱で制作する公式の戦争画「作戦記録画」を描いた。寅治の作品としては《渡洋爆撃》など3点が知られ、海洋美術展などで展示された。寅治は2度戦地に派遣されている。昭和13(1938)年に中国へ渡り、上海から南京、鎮江へ移動しながら、戦闘機や兵士の姿だけでなく、名所や飛行機上から俯瞰した長江の眺めなど、多くのスケッチを残した。昭和18(1943)年にはラバウル、トラック諸島など南太平洋へ派遣され、やはり飛行機からの海や空、現地の風景などを描いた。



〈南太平洋従軍スケッチ〉より《零戦》1943年